

結核予防会カンボジアプロジェクト

結核予防会国際部業務課

伴 良香

平成17年4月1日から、カンボジア・日本の結核予防会共同プロジェクトが始まりました。プロジェクト開始に当たって、平成17年3月19日から21日にカンボジア王国へ赴き、プロジェクトの合同文書調印と、複十字シール募金から今年度プロジェクト費100万円の寄付をしまりました。

太陽の恵みの国、カンボジア王国

カンボジアは、国境をタイ・ラオス・ベトナムに接しており、首都はプノンペン。世界遺産に登録され、国旗やカンボジア紙幣に見ることができるアンコールワットは、シェムリアップというところにあり、訪れる観光客の中に日本人を多く見かけます。季節は、11月から3月までの乾期と、4月から10月までの雨期に分かれます。国内を流れるトレサップ河は世界で唯一、年に一度流れが逆になるという面白い現象が見られます。マーケットには、太陽の恵みをたくさん受けて育った色鮮やかな野菜、果物、花が並んでいます。10年前にプノンペンを訪れたことのある結核予防会青木正和会長は、時間の流れがゆっくりとした農村のイメージを持ったそうですが今では車・オートバイの量がとても増え、その発展ぶりは目を見張るものがあります。



プノンペン市内の町並み。早朝なので人通りが少ない。朝夕のラッシュ時間帯、週末は市外に遊びに行く人々の車やオートバイの流れが多い。

カンボジア結核予防会と新規プロジェクト

カンボジア王国は、世界で結核の高蔓延国22カ国の一つに挙げられます。そのような状況の中、2003年11月にカンボジア結核予防会（Cambodia Anti-Tuberculosis Association, CATA）が発足し

ました。まだ設立されて間もないカンボジア結核予防会に期待される役割は非常に大きく、そこから差し伸べられる手を待っている人々はたくさんいます。CATAで結核対策の活動の中心となっているのは、非常に穏やかなコンキンサン先生です。それ以外のワーキンググループとして5人の医師が活躍しています。彼らは現在CATAの少ない財源のもとで、週末も休み返上でボランティアに近い形で活動しているようでした。その熱心さは、「限られた活動費の中で、どれだけ自分たちの活動を人々に理解してもらえるか一生懸命に努力している」、「何も行動しなければ、何も生まれません。自分たちはお金がないけれども、行動を起こすことは出来る。そして、たとえその活動が小さくても、自分たちの活動を有効的に人に伝えていきたい」と語られる姿から伝わってきました。

プノンペン市内には約300の工場があり、およそ20万人が産業衛生のまだ整っていない劣悪な職場環境の中で働いています。工場ではまだ結核対策は行われておらず、地域には他の病気への対応も含めたヘルス・ポストはありますが、結核の調査や診断・治療の専門技術はまだ十分ではありません。労働職業訓練省と関連のある職業健康管理部の活動はまだ未成熟のようでしたが、組織は一応作られていました。労働者は90%以上が18歳から35歳の女性で、そのほとんどが地方出身者で、小学校に行ったことがないか数年しか通わなかった人たちです。そのため、結核についてマスメディアや新聞・本から適切な知識を得ることや、文字が読めない故に情報を入手することが出来ず、結核ばかりでなくHIV/AIDSなどの感染危険の高まる環境になってしまっています。

プノンペンを訪れたのは週末で工場がお休みだったため実際に工場を訪問することが出来ませんでした。平日はどこからこんなに女性が集まってくるのか、と思うくらいに工場に出勤してくるそうです。紡績工場での女性の活躍や結核の状況は日本の『女工哀史』と重なり、家族を支えるために働きに来ている女性たちが多くいるのではないかと感じました。

プロジェクトは、複十字シール募金から毎年100

万円を拠出して実施されることとなります。工場地域と高齢者及び弱者グループでの小規模な2つの結核モデルプロジェクトで、実施期間は3年間の予定です。



2005年3月19日共同プロジェクト調印式（プノンペン）

寄贈胸部検診車の活躍

2001年に結核予防会茨城県支部より贈呈された胸部検診車は、2002年の全国結核実態調査、2003年のプノンペン市有病率調査に使用された後、結核病床や菌検査室はあってもレントゲンのない旧郡病院などへ出張健診に出掛け、主に木曜日と金曜日に、貧しく中央の病院まで行けない患者さんたちへのサービス、それ以外の日は調査研究などにプノンペン市内や郊外で、大活躍しているそうです。2004年は年間1824名のレントゲン撮影が実施され、患者発見は226名(12%)だったそうです。今回新しく始まったプロジェクトでも人々のニーズに応えてくれそうです。

国王と謁見

この度、2004年10月に新しく戴冠したシハモニ国王に謁見するという貴重な機会がありました。国王が住んでいらっしゃる王宮はプノンペン市内のトレサブ河に面したところにあり、王宮前は広い芝生が広がっていて週末になると人々の憩いの場にもなっています。また、河沿いにカンボジアの国旗をはじめ、世界各国の大きな旗が風に揺られてはためいています。王宮でコンキンサン先生よりカンボジア王国の結核の現状や結核対策への取り組みなどが王様へ報告されました。結核予防会青木正和会長より、今回の訪問の目的・日本での結核予防会と皇室との関係、総裁秋篠宮妃殿下に結核予防関係婦人団体中央講習会で直接お言葉を頂き、婦人会員が心を一に活動に励んでいることなどをお伝えしました。国王より、結核予防会のカンボジア結核対策への協力を感謝と敬意を示してくださるお言葉を頂戴しました。

国際研修生の活躍

プノンペンで、結核対策にかかわっている医師やボランティアの方々とお会いしました。途中「日本に行った時に、あなたに会いましたよ」という青年に出会いました。私もどこかでお会いしたことがあるような、「どこで会ったかしら？」と尋ねたら、「清瀬の結核研究所での研修に参加したことがあって、研修中本部を訪問した時に会いました」と言われました。他にも国際研修卒業生である医師に会い「先生方はお元気ですか？」と質問を受け、研修生当時の思い出を楽しくお話しして下さいました。結核研究所では、国際研修が42年にわたり行われ、今日までに93カ国およそ2000人の卒業生を輩出しています。彼らが世界各地での結核対策の第一線で活躍しています。その姿をカンボジア王国で実際に目にすることが出来、研修の意義・目的が果たされていることについて世界に羽ばたいていった研修生の活躍を頼もしく、また大変嬉しく感じました。

複十字シール募金

今回、新しいプロジェクトに役立つ複十字シール募金は、年間を通して全国から集められたものです。募金者の方々から励ましのメッセージを頂くことも多々ありますが、「結核がなくなりますように」という皆様のお気持ちを大切に善意の募金を結核対策や結核予防の活動に今後も生かしていけたらと思います。

カンボジア王国は、日本人にとって同じアジアとはいっても、まだ馴染みの薄い国かもしれませんが。プノンペン市内のホテルの中は、日本と全く変わりません。しかし、一歩外に出ると地雷で手足を失った人たち、現実の厳しさの中にも真剣に生きる人々の姿、川に飛び込んでのびのびと遊ぶ子供たちの姿を目にします。日々刻々と変化しているカンボジア王国に深い関心を持ってプロジェクトを長い目で見守っていきたいと思います。



マンゴーの木の下で暑さをしのいでたたく牛